

安詞通世斗茂渡

全





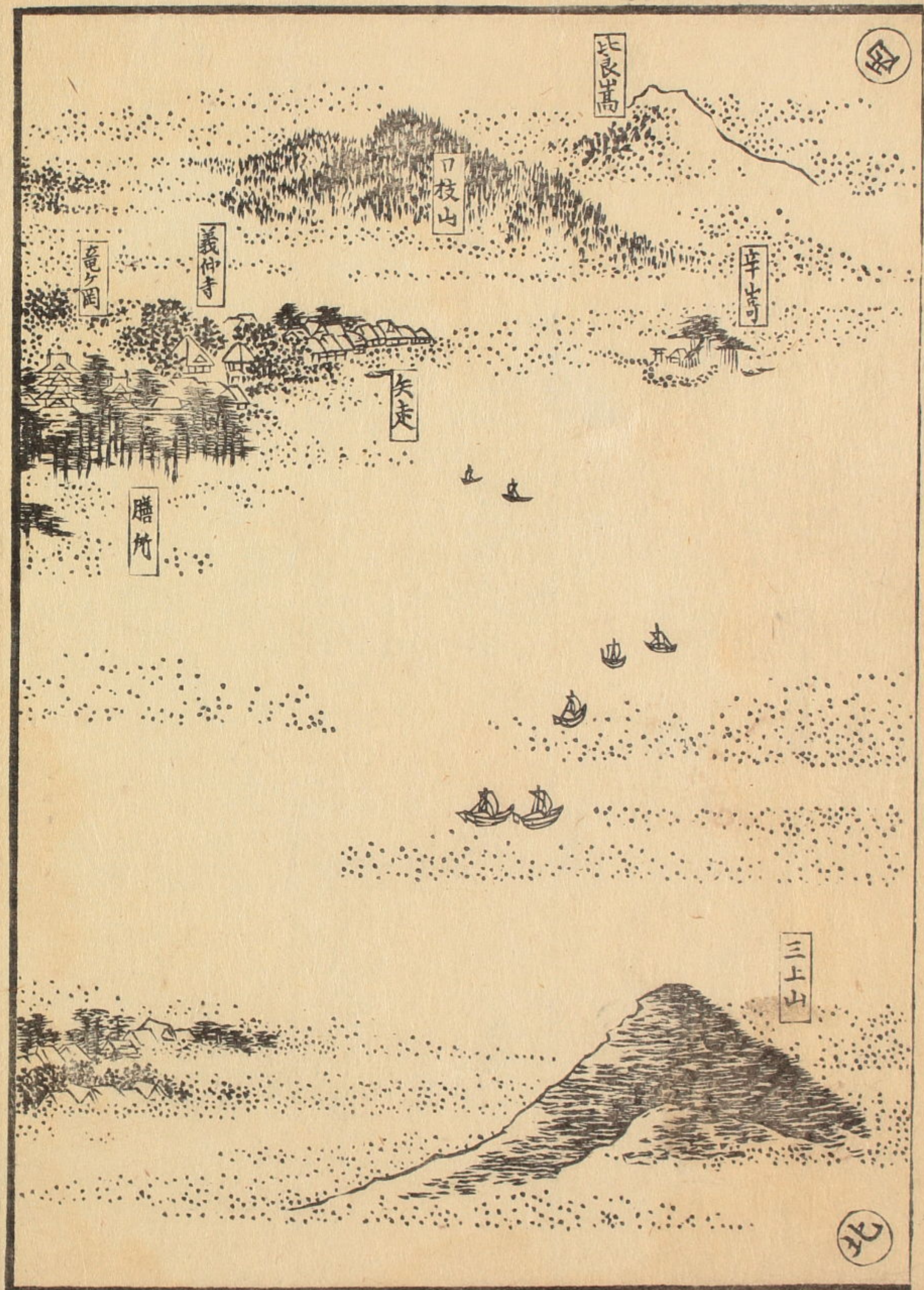
田喜書

田喜書



題芭蕉翁國分山幻住庵記
 何世無隱士以心隱為賢也何處無山川風
 景因人美也間讀芭蕉翁幻住庵記乃識其
 賢且知山川得其人而益美矣可謂人與山
 川共相得焉迺作鄙章一篇歌之曰
 琴湖南兮國分嶺 古松鬱兮綠陰清
 茅屋竹椽總數間 內有佳人獨養生
 滿口錦繡輝山川 風景依稀入俳城
 此地自古富勝覽 今日因君尚益榮
 元祿庚午仲秋日 震軒具艸

右湖南粟津龍崗佛幻菴文章之章
 筠齋紀易書

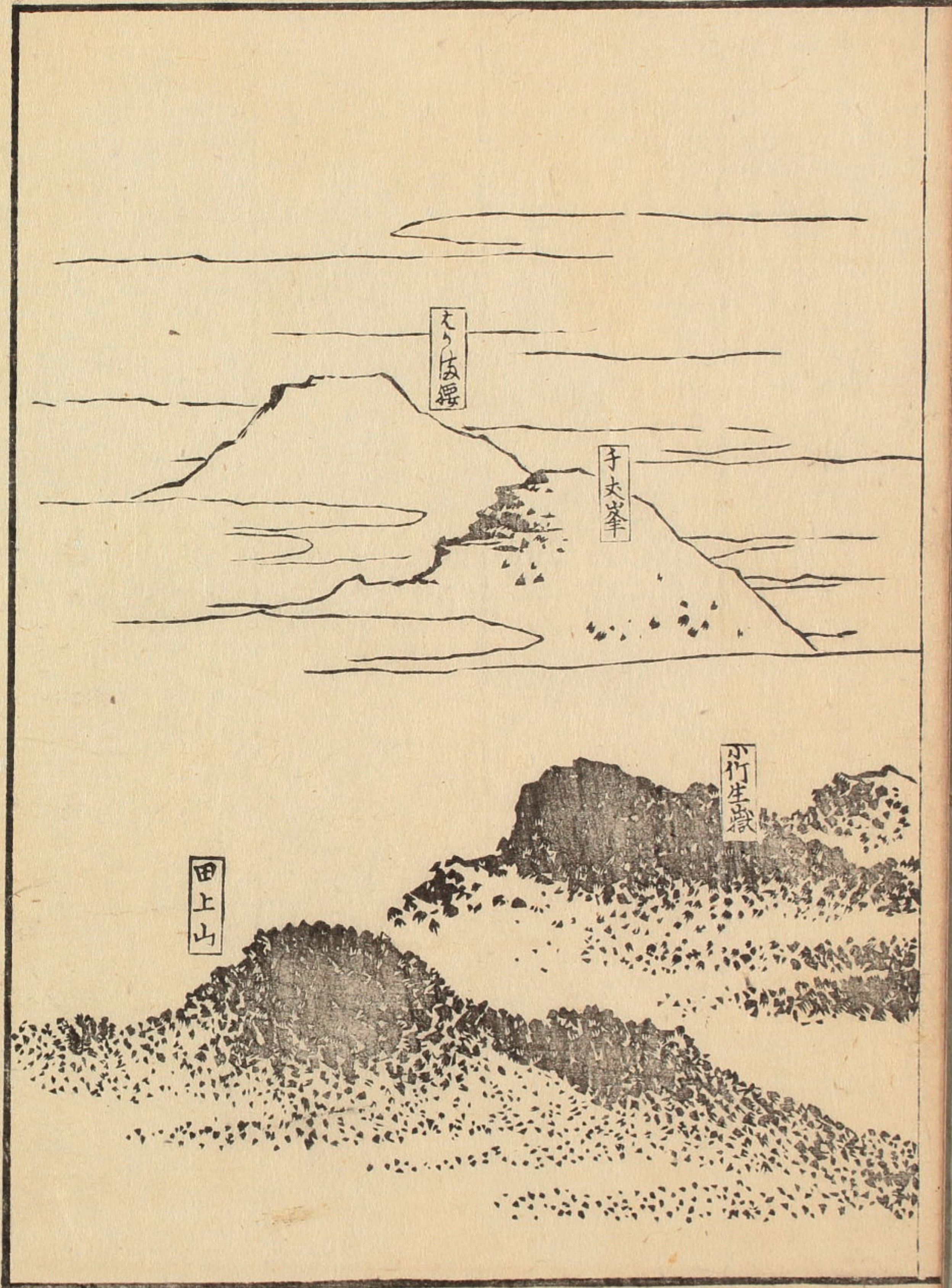


芭蕉のひと

田喜庵南溥護物輯

幻住菴記

この記は芭蕉枕書翁元録三年の夏湖南ト居の記也芭蕉居士
 其伊陽上野藤堂某侯の家士松尾与左衛門宗行の子にて幼名
 金作右甚七郎宗房と云兄を羊麩と云家を嗣て正保の初
 生主君の早世と遇て寛文六年の頃遁世薙髪を此村季吟
 と師とて風雅の一体を以常と老荘を愛し佛頂禪
 師と謁しとまろく参禪を事とし東漂西泊して東武
 深川の草庵とかく休まきい水火の難と苦と先らま
 一とひ古々を帰る終る元録七年戊の冬十月十二日撰陽
 浪花花屋の旅亭に卒に遺辭を依て骸を江南義



仲寺の葬る續扶桑隱逸傳枯尾花芭蕉繪詞あり
〜元書〜

題号 幻住菴記

江及石山の奥國分山は閑居の折の記ありて其まがはる
二とともとのりつ。和漢文藻は云幻住菴の記と云もの三通
右記と賦との差あはる。其翁と年四十七歳の時也と
更按此説いさゝ遠く奥羽行跡ハ元録二年より四十八歳也
幻住菴の山居と日三年午の夏より四十九歳ある處也奥
の細道は猿の物とさかまはる。長月六日よまをこ
伊勢の近宮おくまんと又舟よまをこ有和漢年契ハ元録
二己年伊勢近宮と有又この記中ハ五十年屋近き身ハと云
奥羽象潟の暑き日小面を焦しと何とハハ其行跡の

後ありて五十歳の最のりかきと四十九歳は歎ひ形一幻住
庵ハ瀬田より石山寺は江中程に標石有る後よりハ丁程有る
其齋蹤とつと存せり

庵 釈名曰草以為圓居曰菴菴菴也 以自覆菴也

記 説文曰疏也疏謂二々分別之 廬カ云記者以備不忘
蓋叙事如書史法也叙事之後畧作議論以結之廣韻曰
記誌也云々史記日記の類を云事を其終よりねて述る
を記といふ也長明每名抄に假名よとのかきり哥の序ハ古今集
假名の序を本と日記ハ大鑑の末とすまを習ふと云

日ころ一人の訪てさうりききへんを根をり
 と云ふ勢自法に破るのすけし
此古今 西行
 昔任らん法あるを道に
 〇發心集のいふのち仇なきをすむる
 るは代人の柄家にかたあるは
後京極根成
 胡寺の朝の持をハハ村の
寂筆はあ
 入すまてうのまきをぬ古まの
 〇さへこま物志川のあら
 く雲よかきせん
 幻住庵といふ所の僧何系ハ勇士菅沼
 曲翠子の伯父か人けり
 昔よ来くまふの幻住老人の志をのこ

大まきう草菴のさほより
 二字とらふは
 〇曲翠子の膳所本田侯の家士
 〇菅沼外記と云
 同家中本多八郎左門探山居士六十七才
 也。韓退之曰士之行道不得於朝則山林而已山林士之所
 獨善自養而不憂天下者之所能安也
 予ちり市中を去るり十
 中、ちりさうりの中
 なりきこり

續隱逸傳芭蕉翁傳曰後遇不幸頓懷出塵志道世斷髮
 延宝六年の頃りて三十六歳り
 四十九歳の時かきえ五十年やちりた身と前の十

てうりて云は結しきほし。この虫恒牛なるかき旅原を
何と云ふ世をのきいて一不任の心をきとふ。枕草子
この虫いふあたまをく鬼のまゝに色を枕に似てまゝにおも
しきん地をいふ。古今注曰採蘭雜志曰結草虫一名木
螺一名蓑衣夫人或云一名結草好於草末折屈草葉
以為巢窟愛之有之

破蓮糸集
[癸]の虫は常も居るほははは
仲正
[子]の虫は常も居るほははは
夫本集
[家]と出ぬんかお

この虫は葉山のすてふふり
この虫は葉山のすてふふり
完来

みの虫は常も居るほははは 倍 乙二

井の虫は常も居るほははは 倍 一具

蓑虫の虫は常も居るほははは 武 多代女

さしゆふや花の虫は常も居るほははは 武 青隠

この虫は常も居るほははは 倍 湖山

この虫は常も居るほははは 倍 富女

この虫は常も居るほははは 倍 亀犬

この虫は常も居るほははは 倍 月主

この虫は常も居るほははは 倍 砂粒

この虫は常も居るほははは 倍 阿惠

奥羽象 深のつらつらおもてまゝに
あゆむつらつら北海のつらつら鐘をたたく

こまきよりこの田垣牛の事入る二ツを述る又後ある
 国麿^{光俊}の浦の事近き事ゆへにさす事なれ
 〇嵐の園より約五親志の人の難入を移して市振の事と接結
 九十余里海道のは還より其日妙を爲し一月波荒て
 いよいよいよいよとて其細道は江山水陸の風光教を修
 てる象海の方すをせむ又嵐の事と難きを越ゆる地す寄
 きらりたる然中の園市振の事よりいふこと
 大い〜湖水の澄みたる鳥の〜草葉の流きとてま
 赤魚き草の一もゆるけまの〜形像をいひしめ
 恒根結と〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
 山のやう出〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
 この一段は草葉の事〜恒根結と〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜

恒根結も〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
 め石山の真〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
形改家集
 子と〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
夫本集
 方丈記大〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
 いま〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
桔玉集
 湖の〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
近江
 山〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
伊勢
 早〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
同
 〇〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜事な〜
加賀
 木雄 珪子 菊所 虚白

涼しきや食も物く色を二時

雲布

草も風もくくも夕暮り

如竜

字いふくくも山くくの意

清容

下植

田美

比叡の山比良比高根より辛崎の松を産する

舊事記に日枝懐風藻に神叡山と云えて麻田連陽春の作を

足とく傳教大師より最に比山を冠きくくく東繼

子金子山と云三代実録に大比叡神に比叡神と云中大嶽を

大いえと云西塔と横川の間に小ひえといへて淡海志に叡

山者山城国愛宕郡限峯東方近江西方山城也この山を

植武帝の勅をなすと延暦七年秋最澄山を冠くも日枝と

云くを叡慮に比するの義を以て比叡山と改めく一乘止

観院と号し弘仁十四年額に年号を勅許有て延暦寺に賜

けはくと畧又都の富士と云

拾遺集

比良の嵩もみふよて名をおへる山也比良の大山を云く

雪の名を云く

五葉集

比良の松は史にこの松南北三十八石東西三十間枝四方

半の多し青羊伏龍の松もくはものもわらん

看家集

尊朝親王辛崎の松は記にこの松はつとくやの大松を云く

てくはくも妙く畧は家子新産後海を直れく畧大津の赤

城廓を記すぬくもく其はくく松麓東玉

雑多直壽

とてふらん有畧うのねのまふもくくわいて水の難跡畧
風情のねをくくく病みらまふかかしてて地と
めて枯らま畧千時天正十九年卯の秋の末人もぬさたて
皆後一

おのいりて千はまはへくく遠のねまふく海いそねあきと
と空ゆさてねまのぬくま水つきて春あぬ梢もとと
一海のみよりまてふまの根さくいちまのきねと有くく
受えけく

春の雪比敷ハ何色ハの有る記
予深雪比敷の山もく露く
一あまの枝ハ何色ハの部ハ

江戸

寥松

大梅

巴生

明月や何れはくさくさ比敷の雪
比良の雪大津の柳、露くく
むく山く比良のはくく春まぬ
さくまのまかまのくく春まぬ
くく遠乃籠くくわ 観う 紫
辛家ハ二りもくわ 秋の風
よそのもは二度もくく日や夕のま
人まくく月の出て何れを尻を里
のまの口のふゆくく 華ま先
水まや山流くくく 露
露まくく 玉まのくく 花まくく 中也

京

備中

尾花

無名

三生

儿董

眉山

米彦

長翠

樗堂

壽翁

梅價

掉歌

宜彦

静観

弄山

拾玉集

大井川のつぎは流ようくぬき常流くふたやうり

○水窮のきくき

山家集

山人のくまの宿る心て菴をきく水窮あう

○文選謝靈運詩序天下良辰美景賞心樂事四者難

矣○古今集真名序古天子毎良辰美景一詔侍臣預宴

遊者^ニ和哥^ラ云景色のたふらさをけりく美景く

よわ

菓をうみはをうくく津瀬田の橋

素志

美くまといそくはのり橋多の橋

雉啄

約束の袖もゆるりせりの橋

完爾

あう風の落口もゆき津田結く

午乳

本草くま人の世まや津田の橋

駭鳥

三日月も約るもまは芦も舟

宇橋

衣約のつらも舟もや産も舟

卓堂

約もゆのゆも色替も橋も水

菓二

約も舟結翌日のあつても夏の月

衣月

懐もあつては舟もきん約り糸

椎花

かまもつた舟も推もはけきり峰

沼人

かまもつた舟も推もはけきり峰

一舟

かまもつた舟も推もはけきり峰

玄路実

かまもつた舟も推もはけきり峰

再行

かまもつた舟も推もはけきり峰

雪草

かまもつた舟も推もはけきり峰

松夕

本世よりふる人梅の餅茶 越後 上植 蓬朮
 旅人たはを携来をよこす 上植 里丸
 昔嘗て人も養ひたる不苗時 素磔
 疎くとも植ておのり 越後 苗小 武陵
 舟渡のあも出おけり 越後 成美
 ほくはらやせきよ 越後 一 董 保吉
 とけり 越後 草を籠る 越後 竹 菅 申齋
 膏く 越後 の草 越後 をわ 越後 け 越後 の 杭 越後 羊蹄
 へ 越後 形 越後 を 越後 山 越後 の 越後 量 越後 綱堂
 波 越後 の 越後 濡 越後 の 越後 草 越後 を 越後 籠 越後 る 越後 草 越後 菅 越後 草
 花 越後 を 越後 籠 越後 る 越後 草 越後 菅 越後 草 越後 菅 越後 草
 常 越後 見 越後 たり 越後 草 越後 を 越後 籠 越後 る 越後 草 越後 菅 越後 草

萩の影は雪をうらむ 江戸 花を 江戸 籠 江戸 る 江戸 荷乙
 山草は花をかく 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 玉芳
 膏 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 梅丈
 常 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 菊塙
 子 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 風芝
 多 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 石海
 田 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 昌作
 水 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 叢
 雨 江戸 二 江戸 日 江戸 水 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 一司
 水 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 草雅
 中 江戸 小 江戸 七 江戸 之 江戸 上 江戸 草 江戸 の 江戸 付 江戸 を 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 江戸 の
 古 江戸 き 江戸 插 江戸 も 江戸 籠 江戸 る 江戸 草 江戸 の

三上山一名百足山の形富士に似て近江不二と云。三上社
 麓の三上村に有祭神天御影命。鳥丸光榮御東路紀行
 古くはやくと云ふるをいへばやちよと云ふのふもかきき
 不二御覽の記 堯孝法印
 好むは不二の根を付をちのくかふの山の傍に
 ○武藏野の古き拙くハ續隠逸傳后到武陵造廬於深川
 植芭蕉一株終為菴名真知道去羊の秋江上の破屋に
 師の古巢をたひくくまゝにせしむる川の草庵をけり
 かりいといへばあり

五月雨の目麿きしりや三上山 美知表
 稲のまよかききしりや三上山 月居
 雪もつゆ不足りや三上山 啓山

早苗の中よこえくくく三上山 武蔵 史梅
 印さすくくく押さやききき三上山 春路

田上山の古人をかきき

万葉十二
 田上山の古人をかきき
 田上山の古人をかきき
 ○方丈記栗津系を分て縣丸岩の石を帯比田上川を
 て懐丸まきり墓をきりぬ。毎名抄り人の言たふくく下
 そくくく云ふいふくくく不懐丸まきり墓有たの懐めてくく
 券よのくくくいへくくく人志きく。深草元政の草山集懐丸
 古まう旧跡を尋る記の中より勢多の橋より南に入山中松下を
 出大日山に至り黒津より田上川を渡りて園津をこ大石の
 けり橋をくくくくく橋をよいへはくくくのまききこのまきの

一里南のくさ
 高山也。さうは後いふ大峰より一里南のくさ
 千丈の峰はうの房より坪のふらふらと無きもの
 田のくさのけいさくもさうなればはゆくの紅葉もあんな
 名寄集 近九東院
 小竹寺の嶽は幻住房より東の方田上山のけいさく也

園地を北にまきし信陽のふら

田上のあまをいそぐや山もさち 江戸 瓢箪
 田上くわゆる自然のさき 野 野雄
 田上いさくればさくぬや 下毛 冷水
 田上いさくればさくぬや 下毛 月丘
 けいさく嶽ふたつ峰は後いふ大峰より一里南のくさ
 千丈の峰はうの房より坪のふらふらと無きもの

高山也。さうは後いふ大峰より一里南のくさ
 千丈の峰はうの房より坪のふらふらと無きもの
 田のくさのけいさくもさうなればはゆくの紅葉もあんな
 名寄集 近九東院
 小竹寺の嶽は幻住房より東の方田上山のけいさく也

何しんあは福菓くるをなほす 信陽 乙人
大なるの玉ふきくもや何しんあ 江戶 其翠

形眺るくまぬんくくしんの峰は遠登り松の棚は
くも菓の圓座をなほす 猿の猿掛をなほす

方丈記南小坂の日かきをけし出さる竹の篋子をなほす西
よ扇伽棚をけしる 畧東よへきりきりかきりなほす云

蕨のちもろく種のかげをりか山家集より
折をけしを焼掉しすのさくし折人ふくかきけりやふる

○錦繡段地理之部陳元信之松棚詩旋斫松枝架作棚蒼
髯如戟畫崢嶸清陰堪愛還堪恨遠却斜陽破月明

○抗別鳥窠道林禪師富陽人也見秦望山有長松枝葉繁
茂盤屈如蓋遂棲其上故時人謂之鳥窠禪師元和

中白居易守茲郡時之友也

りの海棠よ果をいし主薄峰の菴を造へる
王翁徐任の徒よハハハハ

山谷詩集 題瀟峯閣 閣在野列 提刑司 徐老海棠果上元注曰徐任樂

道隱於藥肆中家有海棠數株結菓其上時与客菓飲其間
全集王翁主薄峯菴王道人參禪四方歸結屋於主薄峯上嘗

有毛人至其間問道

唯睡辟山民くかすく辱顔不足を投出—空山の風を
打く序に

睡字寐也字彙今睡眠通称辟正亦切与僻同偏也只いむむ
うちある山人くかすく辱くめもは早下の何の宋書云陳搏
隱居花山不仕常喜新睡小睡年年大睡三載云○辱顔司馬
相如大人賦放散畔驥以展顔注展顔即曬巖蕪載詩撰衣

歩屐顔注山顙曰顔廣曰淮泗之間謂之顙屐顔ガニ山
高貌屐セン説文曰𪚇一日呻吟也。事支類聚捫髮論支王猛
隱居華山懷佐世之念植温温入關搯被縵袍而詣ツラナリ之面談當世
之支捫髮而言旁若無人温察而異ナク之。霍林玉露孫仲益
山居上梁文云衣百結之衲捫髮自如柱九節之筇送鳴而去
寄語也

形代了風うらうらう涼い
刈萱は居るくもさく人聲風外
連翹を掃く出づる水は静かな
曉をさほはえぬ暮のまじり
いと静や三株のわづらひ風
温石よさくくわづらひ風哉
一茶
風外
茶静
上総
閑和
愚我

入也は静静の本傍宿

雪鶯

水けりくまめあさけ谷の清水を汲てつ
炊くくくくの常を儘に一爐の侍へい

方丈記南の麓は石をさきて水を汲めくくく
らねと修よく似かひまむ往居のわづらひ也。世に修
き芳世西行菴のくくくの水味よ西行上人のくく
らねと修よのくくくらまむく人よ持多すといへくく
集西行家集あまのきん毎けのくく
沸くくくくくくくくくく山の井の水
くくくくく小堀遠足は芳世も静けくくく
ゆのくくく茶入をはくくくくく

月く〜〜の昔清水汲于区〜
 ともみあひ〜〜の文章の赴一妙の侍〜
 云い〜〜一志は力わ〜〜

草一斗や清水瓶〜
 一村の籠〜
 清水まての影〜
 入二子早よか〜
 くま〜
 葉の葉〜
 草よめ〜
 曇り〜
 隅〜
 木海
 夜鹿
 赤守
 玉蓮
 菊社
 梅塙
 其破
 雪江
 元金

草一の戸や薄の霞を若清も 碓嶺

ち〜昔頃〜人の大〜人高く住〜
 申〜かけは物較家も〜持佛一間を
 履〜申〜申〜申〜申〜
 つ〜下〜下〜下〜下〜
 申〜申〜申〜申〜申〜
 申〜申〜申〜申〜申〜
 申〜申〜申〜申〜申〜
 申〜申〜申〜申〜申〜
 申〜申〜申〜申〜申〜
 申〜申〜申〜申〜申〜
 申〜申〜申〜申〜申〜
 申〜申〜申〜申〜申〜

方丈記〜ち〜の垣〜
 申〜申〜申〜申〜申〜

高良山僧正ハ筑後國御井郡高良山僧正諱ハ一如ト云加茂の
 甲斐ゆゑハ城勅賀茂社神官藤木甲斐守敷直寛永の頃
 の人ナリテ筆道の達人空海の筆意を学びて門人多ク
 此向雲竹依々木志津摩もこの人の門人也小向雲竹俗稱ハ
 ハ良壺門ト云蕉翁ト云ふ家もこの筆意を學子ト云ヒ
 事も有れ。額ハいま粟津義仲寺の文庫ニ現存ナシ。いよ
 うしてハおそくはして也

とく山居といひ旅を傳へしはさうしつゝのふくさ
 履もかゝり本音の捨笠越の菅蓑はさうし
 枕のさへの松よりけたら

○木曾捨笠岐増志畧ニ捨笠ハ木曾の庄蘭村より出村民毎
 年製十萬枚ニ充貢税一月にせめて捨笠足さうしを捨本と云ふ

「本葉ちまね橋ハうらゝ」云の本と云ふ。伊勢との語は、このも
 いまもたれへは、越の蓑蓑金澤の此枝かちうゝる蓑あゝる
 一この記の末、贈蓑「白毛」もさうしつゝ蓑のゆくは、北枝
 かち人の世かまへる古蓑の毛を、世とてさうしつゝの毛
 する買の、小いさうし、松のまじり、白雄
 陽さや履もあゝる、松一、仙草
 さうし、さうし、そのまじり、山、梅、一、囀
 と、お蓑もさうし、さうし、蓑、さうし、松長
 さうし、さうし、さうし、さうし、蓑、上毛、陸堂
 さうし、さうし、さうし、さうし、人、柳、阿分
 さうし、さうし、さうし、さうし、蓑、信長、菅丸
 人の、さうし、さうし、さうし、さうし、相長、薰伝

梅は眼よふ花はくらの星 江戸 守光

暮らさる家いささらの花の星 箕山

ふのつけ梅はつる草の菊 梅壽

玉はちまきし〜ぬ人〜ま〜ら〜る〜動し

何れもふきの翁里の村の古も入集てわのきくの

福くはあ〜〜兔の豆畑かふふ家々あきぬ

農談口既子山の梅子う〜きき

龜山殿七百首御製 羊ふまはは枝の床を履く〜と〜別々山は星の房くね

雲谷雜詠 朱梅庵 野人戴酒來農談日已夕

枝〜は〜あ〜き〜は〜け 兔うね 蕪村

〜の草も庵ハ兔のくはは〜 くらら

猪子〜さ〜福〜き〜五月うね 菅三

兔ホク雪も解〜は〜株 黙巢

い〜は〜や兔のか〜は〜け 天涯

道き〜は〜き〜や〜あ〜あ〜の枝は〜 菅尼

早蕨は影かく〜き〜 兔う菊 丘菟

枝の跡ま〜ゆ〜る〜の〜の月 与木

田〜〜枝〜枝〜も〜怖〜を〜鳴〜枝 圭別

福〜け〜も〜〜は〜あ〜ぬ〜ね〜の〜寺 世南

鳴〜ま〜る〜葉〜や〜山〜田〜の〜福〜の〜中 楳光

時〜や〜い〜の〜の〜あ〜も〜〜葉〜の〜宿 迦孫

ね〜の〜節〜の〜通〜〜福〜の〜枝〜〜は〜 五吹

ふ〜福〜の〜葉〜や〜枝〜〜ま〜〜ま〜の〜雀 秋朝

葉守
 露谷
 吐山
 暮守
 葉守
 露谷
 吐山

夜座去川
 月を待て

唐詩 夜座不厭江上月 盡行不厭江上山
 山家集
 世の中

莊子齊物論曰罔兩問景曰曩子行今子止曩子坐今子起何其
 無持操共

名月のおくもては深山くね
 可都里
 軒簾の鳩もかつの一の月の
 貞松
 雨乃月おとる立居る夢外は
 葵亭
 滝の体世に月は秋とよむ
 魯傑
 月や知る深山の竹を如き水
 大鏡
 暁の月一は一は一は月の雨
 爐扇
 霜かきつ月をいさる梅の葉
 玉光
 夕月ハ有照る山月
 蕉雨
 山人や身は月をけり月宿
 田子
 月をいさる梅の葉はるる
 希拙

月よりのいそがしやむくは清
 月よりのいそがしやむくは清
 月よりのいそがしやむくは清
 月よりのいそがしやむくは清
 月よりのいそがしやむくは清
 月よりのいそがしやむくは清
 月よりのいそがしやむくは清
 月よりのいそがしやむくは清
 月よりのいそがしやむくは清
 月よりのいそがしやむくは清

⑧

三日月のよりけり兼一 薄うけ
 このやうに月夜をいふ小集を
 名月も花も春もをて残あり
 雨の月も花も春もをて残あり
 江も花も春もをて残あり
 夕の月も花も春もをて残あり
 いそがしの月も花も春もをて残あり
 明月やうに花も春もをて残あり
 名月の草も花も春もをて残あり

○

かゝいそがしやむくは清



推の葉よ枝のこもまじり 歌 公 屋為
 川上や 雪のふり 夏あま 哉 季珉
 波もなき 池のくもや 夏木立 惠兮
 水ももくく 推のまじり 江戸 東海
 枝の葉もちるふもあま 四月の菊 可笑
 解あま 西日くえ 推の家 珠弓
 雪おの 推のまじり かんこ鳥 一蕙
 推のまじり 雪まつま 冬日 僅物

文政十年丁亥夏刻成

田喜庵儲藏



田喜庵著述目錄

幻住齋記列證

第一冊

全一冊

刻成

記中名所之圖

北畠為一畫

芭蕉翁肖像

寄記中題諸名家發句

全一冊

刻成

續

信越後記行

全一冊

近刻

亥年梅文庫

六編 羊之出之

刻成

未子年同

亥十月限

七編

五月刻

田喜庵好

喜奇歌序短冊

御衣本所

仙鶴堂

江戸通油町

鶴屋喜左衛門

